

ローマ人への手紙9章14-33節 「神の主権」

1A 憐れみ、頑なにされる方 14-23

1B 憐れみ 14-18

2B 頑なさ 19-23

2A 異邦人の召し 24-33

1B 神の選び 24-29

2B 信仰 30-33

本文

私たちの学びは9章後半、14節からになります。9章からローマ人へ手紙は、「イスラエルの救い」の中身に入っています。福音がユダヤ人をはじめ、異邦人にも信じる者すべてに救いを得させる、神の力であることをパウロは論じてきました。ところが、福音宣教は、主が選ばれたイスラエル人たちは福音を拒み、異邦人たちの間で受け入れられていったというところに、自身ユダヤ人であるパウロは、深い呻きを持っていました。しかし、その捻じれのような神の働きには、私たち人間の思いを超えた神の計らいがあるというのが、9章から11章までの内容です。私たちは8章で、神のご計画というのは、全てのことを働かせて益とさせていただきますというものであることを見ましたが、その計画というのが、私たちの思いや理解をはるかに超えたところで起こっている、ということです。

パウロはこの矛盾のように見える現象について、一つ一つ懇切丁寧に説明をしていきます。6節から9節には、「約束による子」という言葉が出てきます。アブラハムの子孫がイスラエル人ですが、血縁だけであれば、彼の息子のアブシャロムもイスラエル人であり、イサクもイスラエル人ということになります。しかし、そうではなく神が、「私は来年の今ごろ来ます。そして、サラは男の子を生みます。(9:9)」と約束されます。その約束にしたがって生まれた子がイスラエル人でした。同じように、ユダヤ人であってもイエスの名を信じる者こそが、神から生まれた子であるという約束があり、それによって真実なイスラエル人と言うことができるのです。肉によるイスラエル人もイスラエル人なのですが、神の救いについての約束を受けるのは、救われるための召しを受けた人のみであります。

そして、神の約束ということから、パウロはさらに突っ込んで、「神の選び」について語ります。10-13節で、神がイサクから生まれた双子であるエサウとヤコブについて、神はヤコブを選ばれて、エサウを退けられたという歴史的事実があります。ヤコブはイスラエル人ですが、エサウはエドム人です。しかも、神は母の胎内にいるときからヤコブを選んでおられました。つまり、何の行ないもないのに、もっぱら神が選ばれたということで、イスラエル人がいるのです。

このように、イスラエル人の中で福音を信じる者たち、救われる者たちが一部だけであるというこ

との説明をパウロはしています。そこで浮き彫りにされているのは、神の召しがあってこそその救いであり、神の選びがあってこそその救いだということです。

1A 憐れみ、頑なにされる方 14-23

そこで私たちは、信仰生活において、とてつもなく大切な神の働きについて学びます。それは、「神の主権」です。神がある人々を召し、また選ぶのですが、そこには、神がご自分で憐れみを示す者には示し、そうではない者には示さない。」という神の主権があるのです。ここから、人間としてとても取り組むのが難しい内容に入っていきます。しかし、神の主権が分かれば、そこには神の憐れみと恵みの世界も開けてきます。

1B 憐れみ 14-18

14 それでは、どういうことになりますか。神に不正があるのですか。絶対にそんなことはありません。

ヤコブもエサウも、まだ生まれてくる前で良いことも悪いこともしていないのに、それでも神がヤコブを選ばれた。このことは不正ではないか？という感情的な反応です。ある人を選び、またある人は退けられるというのは、不公平であるという反応です。いかがでしょうか？私たちは常に、そのことで悩みます。私たちは本質的に、全ての人々が救われず、選ばれる人々が少ないという事実で悩むのです。「神さま、どうしてそのようなことをなさるのですか？」という問いかけを、いつも心の中でしています。しかし、パウロは、「絶対にそんなことはありません。」と言っています。

15 神はモーセに、「わたしは自分のあわれむ者をあわれみ、自分のいつくしむ者をいつくしむ。」と言われました。

パウロは、先にイサクのこと、そしてヤコブのことを持ち出しましたが、次にモーセの例を取り上げます。モーセに対して主が語られたことが、その問いかけに対する答えになっています。「わたしは自分のあわれむ者をあわれみ、自分のいつくしむ者をいつくしむ。」です。つまり、神は、ご自分の選びについて、もっぱら憐れみの心をもって行なわれているのだ、ということです。この御言葉は、主がご自分の栄光の後姿を、モーセにお見せになった時に語られたものです(出エジプト 33:19)。

これを知ることができているかどうかで、見方が全て変わります。私たちが自分の目線で、人と人、あるいは自分と他の人を比べると、神のなされていることは不公平極まりないです。人を救うなら全ての人を救ってくださればよいのに、と思います。なぜ、選ばれる人々を少なくしておられるのですか？という問いが出てきます。しかし、神と自分を比べる視点で選びを見てみましょう。私たちが神に選ばれる何か、私たちの内にありましたか？いいえ、全くありません。むしろ、私は神に見捨てられて、火の中に燃やされて、永遠の獄屋の中に入れられて当然の人間です。ところが、

神がもっぱら、私を憐れんでおられるから、今の私がここにいるのです。私が選んだのではなく、神が選ばれたのです。エペソ 2 章 4-6 節を読んでみます。「しかし、あわれみ豊かな神は、私たちが愛してくださったその大きな愛のゆえに、罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、..あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。..キリスト・イエスにおいて、ともによみがえらせ、ともに天の所にすわらせてくださいました。」

16 したがって、事は人間の願いや努力によるのではなく、あわれんでくださる神によるのです。

これが分かれば、私たちの肩の荷が降ります。けれども、自分の知性ではもがきます。全てのことは、神の憐れみによって事が進んでいるのです。だから、私たちは神の御手の中で動き、神に身を任せて生きていくのであります。神が全て事を運ばせてくださるのですから。だからといって、それは怠けることではありません。むしろ、神に召されたところに留まる、信仰によって前に進む、ある時には自分の願っていることを捨てて、主の前に立つこともあるでしょう。熱心に主に仕え、努力する部分があります。しかし、主が何かをしなければ、どうにもならないのです。同時に、私たちが何もしなくても、主がしてくださるのです。主は、「先のは後になり、後の者が先になることが多いのです。(マタイ 19:30)」と言われました。「事は人間の願いや努力によるのではなく、あわれんでくださる神によるのです。」というのはその通りです。

17 聖書はパロに、「わたしがあなたを立てたのは、あなたにおいてわたしの力を示し、わたしの名を全世界に告げ知らせるためである。」と言っています。18 こういうわけで、神は、人をみこころのままにあわれみ、またみこころのままにかたくなにされるのです。

パウロは、さらにもっと難しい神の働きを紹介します。神は憐れまれる者に憐れみを示されますが、それだけでなく、御心のままに頑なにもする、というのです。その働きを行なわれた代表例が、エジプトのパロです。有名な文言が、「主がパロの心をかたくなにされた(出エジプト 10:20 等)」であります。主がそのようにされたのは、17 節に引用されているように、神の力をパロに災いを下すことによって示して、全世界が主なる神の名を知らしめるためでありました。主の御名を世界に知らせるために、つまり世界宣教のために、主はパロの心を頑なにされたのです。

さてここで大切なのは、神がパロの心を頑なにされたという言葉には、私たちが考えるような意味合いはない、ということです。パロが主を信じたいと思っているのに、それができないように神がされた、ということではありません。出エジプト記の記述で、そのようなことを示唆する箇所は一つもありません。むしろ、パロが強情になった、という箇所はいくつも出てきます。例えば、「それで、パロの心はかたくなになり、彼らの言うことを聞こうとはしなかった。(7:22)」とあります。そして強情になったと言っている中で、主が彼の心を頑なにされた、という言葉になっています。パロが強情になったと記しているところは、7 章 13-14 節、22 節、8 章 15 節、19 節、32 節、9 章 7 節、そして 9 章 34-35 節です。そして神がパロの心を頑なにされた、というところは、9 章 12 節、10 章 1

節、20 節、27 節、11 章 10 節、そして 14 章 4 節、8 節、17 節です。ですから大方、パロが強情になって、その後で主がパロの自分でかたくしたものを固められた、ということが分かります。

私は、この表現は、次のように言い換えればよいのではないかと考えています。「主は、パロの頑なさを積極的に、ご自分の栄光のために用いられた。」ということです。主は、アダムが罪を犯して以来入ってきた罪と悪について、それをご自分が定められた時まで滅ぼされません。時に、部分的に無くしたりされますが、根本的には終わりの日、新天新地の前の最後の審判の時まで、そのままにしておかれます。悪魔が火と硫黄の池に投げ込まれるのがその時だからです。ですから、主がその悪に対して、どのように対処しておられるのか？主は、ご自身が神であること、主なる神が神であることを知らせるために、栄光を現わすために悪をさえ用いられるということです。善のみならず、悪をさえご自分の栄光にされるということです。「パロの心をかたくなされた」という表現に、そのような意味合いがあります。

イスラエル人がパロの迫害されていたのですが、主はこの迫害によってイスラエルにご自分の救いを見せられました。同じように、世界各地で起こっている迫害では、その迫害によって、かえって教会が清められ、福音が前進しているのを見ます。使徒の働きを見れば、分かりますね。ユダヤ当局が使徒たちを迫害すればするほど、なおのことイエス様の教えがエルサレムの町に満ちました。不信者の頑なさをういられるのです。そして、他にも世界にはいろいろな災い、悪があります。けれども、その災いによって神に立ち返った人がどれほど沢山いるのでしょうか。そういった意味で主は災いをも定められたのです。

2B 頑なさ 19-23

19 すると、あなたはこう言うでしょう。「それなのになぜ、神は人を責められるのですか。だれが神のご計画に逆らうことができますでしょう。」

これも感情的な反応ですね。これは、主を拒んでいる人々が、このように言うのでしょう。「私は、イエス様を信じていません。けれども、この頑なさも、神の御心なんですね。ならば、どうして私を責めるのでしょうか？どうして、頑なにされる神の計画に逆らうことができますか？」と言っているのです。

どうでしょうか？「ならば、今、イエス様を受け入れたらどうですか？」と尋ねるとします。すると、「いいえ、結構です。」と答えるでしょう。であれば、神を責められませんか。自分で決めていることなのです。しかし、頑なにしている人は、災いがあることを知ると、「なぜ神はこのような災いを許されるのか。」と神を責めるのです。先に話しましたように、神は心を低くする人を無理やり頑なにされることはありません。既に頑なにしている者たちさえ、ご自分の栄光のために用いられるということです。

20 しかし、人よ。神に言い逆らうあなたは、いったい何ですか。形造られた者が形造った者に対して、「あなたはなぜ、私をこのようなものにしたのですか。」と言えるでしょうか。

ここには、とても大事な神の真理があります。これは、「神は神、人は人。人は神ではない。」ということをつまづき易くしている喩えです。神は造り主であられ、私たちは造られた物です。神が陶器師であり、私たちは陶器です。この違いを忘れてしまうので、私たちは混乱してしまいます。

実はこの喩え、預言者イザヤも、またエレミヤも語っていたことです(イザヤ 45:9-10、エレミヤ 18:5-10)。イザヤは、異教徒であるペルシヤ人クロス王が、ユダヤ人をバビロンから解放するために神が用いることについて、文句を言っているユダヤ人に対して、ここ 9 章 20 節でパウロが引用している言葉を言われています。なぜ神の民であるユダヤ人が、異教徒によって解放されなければいけないのか？という問いかけです。けれども、主がご自分のなされるようにしているのに、何で文句を言っているのか？ということです。

神のこの真理、主権を知ることは、私たちの信仰につまづきが起こらないように守る、とても大事な点です。私たちは、自分中心に考える傾向があります。自分の考えや思い、気持ちを神にまで投影させる傾向があります。「これは、当然のことである。当然の権利である。」と思ひこんでいます。けれども、例えば自分が小学生であった時に、親のしていることの全てを悟ることはできたでしょうか？できるはずがありません。自分の経験していることが、いかにちっぽけかは、大人になれば分かります。うっかり、忘れてしまうんですね。私たちはただ、神の力強い御手の下にへりくだるしか、できないのです。

私たちは、神が愛であることを知っています。しかし、その愛さえも私たちは当たり前だと思うと、神の愛を知ることはできません。神が愛であることを当然と考えていたら、おそらく、自分自身が神になっているでしょう。そして、独りよがりな愛を神に認め、満たされないで神から離れていくようになります。神は主権者です。ですから、人を憎もうが何をしようが、神にはその権利があります。しかし何でもおできになる方、何でもする権利があるお方が私たちを愛された、というところに、神の真実な愛が表れています。神が御子をお与えになったほどに世を愛された、ということが、どれほど不公平なことなものであるかを知る必要があります。そんなことをする必要が全くない。非常識である。とんでもない、そういったことを神が私たちに行われました。神が主権者であるからこそ、他の神のご性質や働きがそのままの姿で、正しい姿で現れるのです。

21 陶器を作る者は、同じ土のかたまりから、尊いことに用いる器でも、また、つまらないことに用いる器でも作る権利を持っていないのでしょうか。

これは先ほど話したことです。「つまらないことに用いる器」とは、パロのような神に対して頑なにしている器のことです。あるいは、悪や災いと言ってもよいでしょう。主はもちろん、全てを造られて

それらを良しとされました。そしてアダムが罪を犯したので、被造物に傷がつきました。罪や悪、災いがあります。けれども、それら罪や悪、災いさえも、神のために使うことができるということです。

22 ですが、もし神が、怒りを示してご自分の力を知らせようと望んでおられるのに、その滅ぼされるべき怒りの器を、豊かな寛容をもって忍耐してくださったとしたら、どうでしょうか。

ここは、とても大切な視点です。パウロは、いつまでも自分の心を頑なにしている訳で、そのことを神は初めからご存知でした。ですから、神は速やかにパウロを滅ぼすことができになったのであり、滅ぼしても神は正しいとされるでしょう。しかし、パウロには災いが十、下りました。これはパウロを十度、痛めつけるということではありません。その正反対です。「豊かな寛容をもって忍耐してくださった」ということです。主はパウロにこのように話しておられます。「出エジプト 9:15-16 わたしが今、手を伸ばして、あなたとあなたの民を疫病で打つなら、あなたは地から消し去られる。それにもかかわらず、わたしは、わたしの力をあなたに示すためにあなたを立てておく。また、わたしの名を全地に告げ知らせるためである。」本当なら、彼は当の昔に滅ぼされていたのです。神は、彼が最後まで頑なであることをご存知でした。けれども、彼に対して悔い改めることのできる機会を、その災い一つ一つに示しておられたのです。

これもまた、私たちの知性では理解しがたい神の行動です。神は予め全てを知っておられます。神にできないことは学習することです。後で、「ああ、そうだったのだ。」と驚くことができません。しかし、それでも神は憐れみと豊かな寛容を示して、その人が悔い改めるのを待つ、ということを行なわれます。その典型が、イスカリオテのユダです。イエス様は初めから、彼が裏切ることを知っていたながら選ばれて、そして最後の晩餐の時に至るまで、彼に悔い改めを迫っていました。

23 それも、神が栄光のためにあらかじめ用意しておられたあわれみの器に対して、その豊かな栄光を知らせてくださるためになのです。

パウロは、怒りの器から、憐れみの器に話しを移していきます。イスラエルの民が、この時は憐れみの器でした。パウロに対して神は力ある業を示すのと同時に、イスラエルをその災いから守り、エジプトから彼らを救われました。そこに、豊かな栄光が現れていました。怒りを示すところにも、また彼らを救われるところにもご栄光が現れていました。

これらの神の働きから、私たちはとても大切なことを学びましたね。すべては神から始まる、ということです。自分から何かをして、そして神が応答するというような信じ方をしている人は、必ずつまずきます。自分の行ないが基となっているからです。けれども、信じることも、信じて生活して、教会で生活することも、すべてが神から始まっています。神が召されます。神が選ばれ、立たせます。すべてのことは神から来ているので、自分の目には災いに見えても、しかし神がご自分の栄光のために用いられるということ。そして、自分たちの願いや努力ではなく、全ての事は神の憐れ

みが進むこと、等であります。神は時にそのことを敢えて行なわれるために、私たちの願いや努力と裏腹のことを行なわれることさえあります。初めの者を後にして、後の者を初めにしたりします。

2A 異邦人の召し 24-33

1B 神の選び 24-29

24 神は、このあわれみの器として、私たちを、ユダヤ人の中からだけでなく、異邦人の中からも召してくださったのです。

ここから、神の異邦人への働きかけを読んでいきます。これまでは、イスラエル人の中でも、神の怒りの器になっている者たち、すなわち悔い改めないで、イエスがメシヤであることを拒絶する者たちがいる一方で、憐れみの器、主イエスを信じて、従っている者たちもいる、という話でした。そしてこれから、異邦人をも召してくださったという話に移ります。

ここで大事なのは、私たちがユダヤ人を神が選ばれたその選びと召しで、私たちも選ばれたのだということです。ですから、これまで神がアブラハムからイサクを召し、ヤコブを選び、モーセを憐れんだという一連の働きは、そのまま私たちに対しても行なわれている、ということでもあります。ですから、私たちはイスラエルに対する神の憐れみからは、目が離せません。彼らを憐れんでおられることを見ることは、私たち異邦人をも憐れんでおられることを見ることができます。

25 それは、ホセアの手紙でも言っておられるとおりです。「わたしは、わが民でない者をわが民と呼び、愛さなかった者を愛する者と呼ぶ。26 『あなたがたは、わたしの民ではない。』と、わたしが言ったその場所で、彼らは、生ける神の子どもと呼ばれる。」

このホセア書の箇所では、アッシリヤに捕え移された北イスラエルの民が、その時は「わが民ではない」との宣言を受けましたが、彼らが必ず戻ってくるとすることで、「わが民、愛する者」「生ける神の子ども」と呼ばれるということです。文脈はイスラエル人に対してのものなのですが、けれども、原則は異邦人に当てはめることができます。彼らが、イスラエルの民ではない、神の民と呼ばれる者たちではないのに、しかし神は憐れみと愛によって異邦人をもご自分の民と呼び、また神の子どもにもしてくださる、ということです。

27 また、イスラエルについては、イザヤがこう叫んでいます。「たといイスラエルの子どもたちの数は、海べの砂のようであっても、救われるのは、残された者である。28 主は、みことばを完全に、しかも敏速に、地上に成し遂げられる。」

異邦人の多くが神の民と呼ばれるのに対して、パウロはイザヤの預言を取り上げて、肝心のイスラエル人の中では、残された民として救われる者たちの数が少ないことを言及しています。イザヤ書には、イスラエルの民が神の裁きを受けて、十分の一が残るけれども、さらに焼き払われる、

けれども、切り株のように残る、彼らこそが聖なるすえだ、と書いてあります(イザヤ 6:13)。切り株のように少ないのだということを強調しています。事実、イスラエル人がイエスを信じるというのは、初めはそうでしたが、初代教会から異邦人が多く加えられていき、イスラエル人で信じる人はわずかでした。近年、その数は増えて来ています。

29 また、イザヤがこう預言したとおりです。「もし万軍の主が、私たちに子孫を残されなかったら、私たちはソドムのようになり、ゴモラと同じものとされたであろう。」

大事な教えが、残された民についてあります。それは、「残りの民がいれば、民全体が赦される」という原則です。ソドムとゴモラも、アブラハムの執り成しにより、十人正しい人がいれば町全体を赦すと神は言われていました。十人もいなかったのも、火と硫黄によって滅ぼされましたが。けれども、イスラエルには必ず残りの民がいます。それで、神は決して彼らを滅ぼすことはなく、終わりにはみなを救ってくださる、ということです。

2B 信仰 30-33

このように、異邦人が神の民となり、イスラエル人には残りの民のように、少ない者たちがイエス様を信じているという状態を述べました。次から、神の主権から人の責任に話が移ります。イスラエルが福音を信じないのは、そこに神の主権があるからだというのが、これまでの議論でした。しかし、説明しましたように、そこにイスラエル人の意志が無視されているということではないのです。彼らは信じる選択をすることができました。けれども、行なわなかったのです。

30 では、どういうことになりますか。義を追い求めなかった異邦人は義を得ました。すなわち、信仰による義です。31 しかし、イスラエルは、義の律法を追い求めながら、その律法に到達しませんでした。32 なぜでしょうか。信仰によって追い求めることをしないで、行ないによるかのように追い求めたからです。彼らは、つまずきの石につまずいたのです。

神の召し、その恵みの背後には、必ず、信仰か、行ないか、という問題が発生しています。ここでは異邦人は、神の召しというものに応答するというを知っていました。神が憐れんでおられる、ということ信じ、受け入れ、そして自分の身を任せると信頼へとつながります。それが信仰による義です。ところが、人は自分で何かを行なって、それでその報酬が得たいと思っています。ユダヤ人には律法が与えられていました。それで、これを行なえば義と認められると思っていました。けれども、これまで見たように、事は自分たちの願いや努力ではなく、事は神の憐れみによるものでした。ですから、そこに自分たちの業の要素はなくなる訳です。それでも、自分で何か義を達成しようとする、必ずそれは達成できません。それで、つまずくのです。

日本人の場合、日本語の「信じる」という言葉さえが、行ないによる義になっています。それは第一に、信じるということが、信心深さというような気持ちや心境に到達することだと思ってしまうこと

です。自分にいささかの疑いの心があれば、それでは信じたことにならない、と言って、自分が信じているかどうかという自意識ばかりが膨れ上がってきます。けれども、信心深さではないのです、イエス様は、「からし種のような信仰があれば、山も動かすことができる。」ということをおっしゃいましたね。それから第二に、信じれば何かを得られるという交換条件にしていることです。何か益になるものがあるから、天国に行けると聞いたから、それが欲しいから信じました、という類いのものです。それも信じることではありません。むしろ、「これこれをすれば、祝福される。」という、行ないによる義なのです。主の愛の呼びかけ、その声を聞いて、応答することが信仰であり、神が先なのです。私たちは受けて、応答する者なのです。

ですから、求めている者が義を得て、求めている者が義を得ないという逆説が起こっています。先のが後になり、後のが先になるのです。

33 それは、こう書かれているとおりです。「見よ。わたしは、シオンに、つまずきの石、妨げの岩を置く。彼に信頼する者は、失望させられることがない。」

これはイザヤ書 8 章 14 節と 28 章 16 節に書かれているものの引用です。アッシリヤに取り囲まれているシオンが、そこにおられる主、王なる方にすがっているかどうか、であります。すがっている時に神がアッシリヤを滅ぼされます。けれども、エジプトなど他のものを頼りにしていくとき、頼ろうと思えば思うほど、悲惨な結果を辿ります。シオンに主がおられること、これがその人にとって救いともなるし、また、つまずきともなります。

これを、ペテロは第一の手紙 2 章 6-8 節で引用し、主イエスにすがる者に当てはめているのです。この岩なる方はキリストです。この方だけに望みを置くもの、信頼する者にとって、この岩は救いとなります。同じ岩なのですが、行ないによって何かを求めようとすると、全くその功績が認められないし、認められないどころか、ますます自分ができていないことが明るみになるので、つまずくのです。同じ岩なのですが、一方ではつまずきになるし、もう一方では救いとなります。

このように、同じ岩、イエス・キリストが、救われる人とつまずく人と二つに分けるようになります。ある意味で人々は、必ずイエス様を見る時に、真っ二つに分かれるのだということでしょう。つまずくか、あるいは救われるかであります。